

佐渡地域環境再生ビジョン 【トキ野生復帰 環境再生ビジョン】

トキの野生復帰の目標について

トキ野生復帰にあたって、トキの野生復帰エリアである小佐渡東部地域に「どれだけの個体数があれば、トキの絶滅を回避できるか」を、最小存続可能個体数（MVP, minimum viable population）等により分析した上で、次のとおり野生復帰の目標を定めた。

【目標】 およそ10年後(2015年頃)に
小佐渡東部に
60羽のトキを定着させる。

この目標の実現のためには、次の2項目の実施が必要である。

「トキの個体の確保」のために「人工増殖及び野生順化」を進めること。

「トキが生息できる環境づくり」のために、少なくとも60羽のトキが定着できる自然環境づくり」及び「社会環境づくり」を進めること。

「トキの個体の確保」について

(1) トキの人工増殖の推進

トキの個体の安定的な確保のため、佐渡トキ保護センターにおいて遺伝的系統管理に配慮しつつ、個体の人工増殖及び母集団の保存を行う。

(2) トキ野生順化施設の整備と順化訓練の実施

小佐渡東部地域の^{うすくらざわがわ}薄倉沢川上流部にトキ野生順化施設を整備し、飼育下のトキに野生下での生存に必要な能力(採餌、繁殖、飛行、集団生活等)の獲得訓練を行った上で、野生復帰を進める。

「トキが生息できる自然環境づくり」の目標について

1. 農地での取組

【目標】

水田や水路には、7～8cmのドジョウが1m²に1匹以上生息する。

水田や湿地では、ヤマアカガエルの成体が10m²に1匹生息する、あるいは

早春に1haにつき15個程度の卵塊が見られる。
畦畔や周辺の草地には、1m²に大小合わせて2～3匹のバッタが生息する。

【目標達成のために実践すべきこと】

< 中山間地域 >

- ・ ドジョウ、カエル類などの水生生物の生息環境となる棚田の復田
- ・ 陸生昆虫類（バッタ・イナゴ類など）の生息環境としての草地の整備

< 平場地域 >

- ・ 休耕田のビオトープ化
- ・ 耕作田、用排水路の改良

2. 森林での取組

【目標】

アカマツ・コナラなどの高木の保全。
営巣に適した高木から500m以内に餌場がある。
沢にはサワガニが1m²に大小合わせて2～3匹生息する。

【目標達成のために実践すべきこと】

- ・ サワガニの生息環境としての健全な沢環境の整備
- ・ 営巣地づくり・ねぐらづくり

【トキの生息環境整備のための森林管理のカテゴリー区分の提案】

- . 生息地周辺の放棄里山林（広葉樹林）の成長を促進するための択抜施業（コナラ・クリ類の萌芽密度コントロール）
- . 生息地周辺の放棄スギ人工林の健全性を保つため（地滑り・土砂流出防止）のための間伐施業
- . 棚田再生のために、谷地に侵入した樹木を排除する除伐施業
- . 特定の営巣木の成長を促進し、トキの侵入スペースを確保するための除伐施業

「トキが生息できる地域社会づくり」の目標について
（トキとの共存に向けた協働の軸組と各主体への指針）

1 「地域社会づくり」として行われた保全活動と協働事業

小佐渡東部の12地区において、トキの野生復帰をめざした地域社会づくりとして、ボランティア活動による餌場環境整備、環境保全型農業の模索、集落文化の見直し作業が実施された。

平成12年度から実施してきた地域社会づくりの取組と3年間における取組の広がりについては、別紙2のとおり。

今後、実施地区を拡大し、これらの維持保全活動を体系化すること、誰でも

参加できるわかりやすいシステムを構築すること、トキ基金の募金活動と合わせた散策ツアーなどで活動の裾のを広げること等が重要である。

「共生と循環の地域社会づくり」を実現させるためには、新たな協働事業の創設が必要です。すなわち、協働の軸を明確に定め、異なる主体同士が、連携するシステムと場を持つ、新たな協働の場とシステムを構築すること重要である。

協働事業を進めるためには、調整役とサポーターが必要。

協働の仕組みについては別紙3のとおり。

協働事業を実効性の確保には、協働の軸となる拠点施設と情報を共有化するシステムが必要であり、協働の短中期計画の策定が重要である。

2 協働事業における重点事項 (協働を創造する10のしくみ)

トキを軸とした島づくり協議会の設置と運営(各主体間の協働と調整)

- 1) トキを軸とした島づくりに関する情報の集約と発信事業
(情報センター機能)
- 2) トキ博士をめざす資格制度、環境教育プログラムの開発事業(社会教育)
- 3) トキを軸とした総合的な学習の時間の支援(学校教育)
- 4) 地域社会活性化のための研究旅行の誘致と連携(大学)
- 5) 餌場環境・営巣環境整備のためのボランティア計画の立案と実践
(ビオトープづくり・森林整備)
- 6) トキと人に優しい環境保全型農業との連携活動(農業)
- 7) トキを軸とした地場産品の開発と販売支援事業(産品)
- 8) トキツーリズム計画立案と旅行業者との連携活動(観光)
- 9) トキ基金の普及と運営窓口の設置、トキの森公園環境協力費による会館事業の実施
- 10) 全国レベルの情報交流のための先進地交流会議「自然共生サミット(仮称)」の企画と実施

トキの野生復帰の地域社会ビジョン(こんな佐渡をめざそう)

- 子どもたちが、緩やかな変化をもつ安全な水辺で遊んでいる。
- 水辺は、ドジョウやメダカ、タナゴ、ゲンゴロウなど、たくさんの生き物が暮らしている。
- その水辺は、農家の祖父の指導で、地元の青少年、都会の若者や修学旅行の生徒、国際交流で佐渡を訪れた外国人たちの手によって、昔ながらのや

り方で保全されている。

- 新たな観光として生まれたトキツアーでは、トキ保護に関わってこられたトキ博士たちから、直接話を伺い、かつてトキ観察員だった方からは、野生のトキを見た頃の話が聞けた。その恩返しもあるって、私にできる保全活動に参加させてもらった。
- 都会にもどっても、今では、佐渡の産品をいただくようになりました。トキの餌場づくりのために、丹念に育てた棚田米や、営巣木周辺の林床に育ったシイタケ、イカやタコ、トビやアジ、そして冬のカニや寒ブリは、いつ食べても絶品です。
- トキツアーが訪れるようになった前浜地域では、農家レストランができて、かつてトキが訪れた棚田で海山里の幸を出している。
- 餌場保全にきた学生が、いつのまにか集落の文化活動にも参加するようになり、外部の若者が加わったことで、あとの息子が気楽に帰ってきてくれた。
- ガイドという仕事は、バスの案内かとおもっていたらいつのまにか、爺さん婆さん達が田んぼでガイドを行っている。
- 環境保全型農業の講習会が頻繁にあり、集落の中で取り組む農家が増え、技術も年々向上している。